



はくとうき



衣玖矢 曇

深の深なる者、鬼。

拍桃姫は、粗悪と対峙していた。

鬼である。

幾重にも鬼と戦ってきた彼女であるが、恐怖だけは常に付きまとう。

体の震えこそないが、五体が硬直していることを自分で感じていた。

粗悪は、鬼の中でも格下の部類であり、人でも武器を使えば難なく倒せる存在である。

しかし、決して油断してはならない。

そのことを月を赤黒く照り返す粗悪の上半身が訴えていた。

粗悪は突進し、拍桃姫との距離を詰める。独特の鉄の匂いが強くなっていることを感じつつ、冷静に太刀の角度を変え、カウンターを狙う。

チャンスは一度だけだ。

拍桃姫は、頭の中でいち、に、さん、いち、に、さんとリズムを刻む。

「さんっ！！」頭の中の数字を声に出したとき、おぞましい面は宙へと飛んだ。

司令部位を失った四肢は地に崩れ落ちた。

太刀に走った衝撃を消化しきれない両腕は、太刀を握り続けることができず、それを重力に任せた。

「はぁ・・・」ため息を声に出し、仰向けに倒れ、時おり霞む月を仰いだ。

ただ、今は血の匂いは不思議と感じず、鼻をくすぐるのは湿った腐葉土の香りだけであった。

【序章終わり】

鍛冶屋、吹子屋にて。

町中を歩くだけなのに、少し緊張してしまう。

「はぁ」拍桃姫は、思わずため息を口に出してしまう。

ハッと誰かに聞かれたのではないかと視線を周囲に流すが、他の人たちは彼女のことなど目に入っていないようで、大通りの流れは決して止まりはしない。

季節は初夏、歩くだけでほんのり汗ばんでくる。

しかし、ベタつくような汗ではなく、柔らかな風は、緩やかに体温を下げていく。

薄く甘い香りが体を満たしていることを知覚しながら、拍桃姫は目的の店へ急ぐ。

目指すは、吹子屋だ。

いつ訪れても、吹子屋は真っ黒で、生命を感じさせぬ鉄の香りで満たされている。

だから、吹子屋は町外れに追いやられるように存在し、町人や普通の旅人は来ない。

ゆっくりと暖簾を分け扉を開ける。

人が手をかける部分は藍染めの色が落ちている。

いつも訪れるたびに、この暖簾はいつ変えるのだろうと、拍桃姫はいつも思う。

そして、いつも自分が同じ感想しか無いことにちょっと嫌な気分になる。

そんな自己嫌悪は、店主の一言でピシャリと止めさせられる。

「最近の若い子は挨拶もできないのかね」

たたら火で鍛えあげられた筋肉質の体から発せられる明瞭な声は、不思議と嫌味な感じはない。

「あつごめんなさい。おやっさん、こっこんにちは」拍桃姫はぼそぼそとこぼす。

ソフッと吹子屋の親父は一気に表情を崩す。

「ところで、いつものだろう。ハクよ。」

いつものおやっさんの声になったことに安心しつつ、彼女も渡すべきものを台の上に置き、座布団に腰を下ろす。

「う、うん」と返事をしようとしたとき、トンと湯呑みが置かれた。

ずっと視線を上げると明るく響く声が間髪入れず浴びせられる。

「元気にしてた。ハクちゃん。ソフフフ」おやっさんの奥さんである。

元気かどうかなど、ハクの姿を見ればわかることではあるが、それでも訪れるたびに自分のことを心配してくれる。

そのことをくすぐったく感じる。

「んでっ何匹斬ったんだ？」台の上の太刀、破久修を触りつつ、おやっさんが尋ねる。

「えーと、2匹くらいかな」ぼそりとこたえる。

チャッ 抜刀され、鈍く、光る刀身が頭になる。

「ソフッ んで、本当は？」破久修の傷んだ刀身を覗き込む。

「8匹。」拍桃姫は俯いてこたえる。

「だろうな。」笑顔でおやっさんが破久修を鍛冶場に持っていく。

本来、太刀は戦闘用の刀であるため、複数回斬り続けても欠けや曲りも装飾品の刀と比べればほとんどないに等しい。

それでも、対鬼となれば話は変わる。

硬い鬼の外殻を破るとなるとさすがに太刀とはいえ、消耗は著しい。

そのため、拍桃姫の愛刀、破久修も複数回の戦闘で刃が零れてくる。無論、その痛みが酷ければ酷いほど、修繕費は高くつく。

ただ、拍桃姫だけは、どんなに酷い状態であっても、修繕費は格安で峠の茶屋でお茶菓子セット3つ分という破格である。

それは、拍桃姫を吹子屋夫妻が気にかけているからであり、常に、破久修を最良の状態にしようという好意からである。

そして、そういった好意をわかっているからこそ、心配させまいと鬼の数を少なめにこたえたのだが、鍛冶屋に刀身の状態を見られた上でそんな嘘をつき通せるわけもなかった。

「何日かかるかわからんが、ゆっくりしていけ。」

鍛冶場の暗がりから聞こえるおやっさんの声は先程とかわらぬ、カラッと乾いた明瞭な声のままであった。

いつのまにか横に座っていた奥さんが拍桃姫の象牙色の髪を優しく撫でてくれた。

「そうだっハクちゃんに見せたいものがあるの。」

奥さんは、思い出しかのように胸の前で手を合わせ、ハクに優しく微笑んでみせた。

悲しい現実

奥さんは、踵を返し煩雑にものが置かれた棚をガサゴソとし始めた。
拍桃姫は、奥さんの後ろ姿をじっと見つめる。
柔らかなふっくらとした体、ほっそりした生傷の多い私の体とは全然違う。
拍桃姫は、素直にそう思った。
「これなの♪」振り返り、微笑んだ奥さんの手には、絵本が収まっていた。

絵本には、桃の絵と男の子が描かれていた。
拍桃姫は、少し顔を歪ませた。

『ももたろう』

そう絵本には書かれていた。
今では、決して手に入らない、禁書だ。
そして、拍桃姫の父、桃太郎の活躍を描いたものである。
今はいない、父。
皆からの畏敬を集め、誰にでも優しく、誰よりも拍桃姫を愛してくれた。
じんわりと父との思い出が心の中に溢れてくる。
拍桃姫の表情を読んだのか、絵本を拍桃姫に渡し、また優しく髪を撫でてくれた。

「この前、たまたま見かけてね、ハクちゃん、お父さんの思い出の品持ってないって言ってたから。」ゆっくりと語りかける。
今では禁書扱いの『ももたろう』、普通では入手など不可能だ。
所持の罰則などないが、一般の人からすれば、誰が好き好んで、この本を所持するだろうか。
そう、大嘘付きの桃太郎の絵本など。
そのため、様々なところに働きかけてこの絵本を手に入れてくれたのだろう。

俯けた顔を上げ、ぎこちない笑顔で拍桃姫は、はっきりと大きな声で言った。
「ありがとうございます。」
その声は、鍛冶場のおやっさんにも届いた。
「けっ、こんなにぼろぼろになるまで使って。」おやっさんは小さな声でぼやく。
しかし、その目には、暖かなものが溢れそうになった。
「おっといけね、さぁ鍛え直すか」その声は、確かに、拍桃姫と奥さんに届いた。

吹子屋二階にて、ももたろうを振り返る

吹子屋の二階は簡易宿になっている。

とはいうもののそこを利用するのは、拍桃姫しかいない。

それに、吹子屋夫妻の寝室もあるので、まず、吹子屋を利用するような屈強な男には貸し出されない。

鍛冶場、吹子屋で刀や太刀の鍛え直しを頼んだ場合、代刀が貸し出される。

代刀なので、無名の大量生産品だが、おやっさんが鍛え直したもののなので十分使える。

そのため、ある客は、代刀目当てに鍛え直しを頼みに来たりもする。

勿論、拍桃姫にも代刀は貸し出されるが、拍桃姫は借りずにいつも、簡易宿で破久修の帰りを待つのだ。

拍桃姫にもわからないが代刀では、どうも戦闘欲が出ない。

拍桃姫は、二階の引き窓に腰掛け、通りを眺めた。

その右手にはももたろうの絵本を握られている。

破久修は、まだ遠分、帰ってきそうにない。

破久修をおやっさんに預けるたびに、いつも眺めるこの景色だが、飽きることはなかった。

賑やかな街並みや子供たちの竹を割ったような笑い声、いつも拍桃姫には新鮮に感じられた。

だからこそ、鬼の恐怖から人々を救いたい。

いつもそう思う、そして、引き続いて次の想起がなされる。

この思いは、父様にもあったはずだ。

なのになぜ、あんな嘘の報告を朝廷にしたのだろう。

拍桃姫は、一人で考え事をするといつも、このことを考え始めてしまう。

結局のところ、それは父様しか知り得ないことだという結論になるのだが、それでも考えることを止められない。

自然と右手に力が入る。

拍桃姫の父、桃太郎は桃から生まれたとされているがそれは違う。

桃型の船に乗り、育ての爺様と婆様に拾われた。

桃型とは、他に類を見ない船の形をしており、他に例えがなかったため桃という形容がなされた。

そのことを知るのは、爺様、婆様、拍桃姫など一握りの人しかいない。

桃太郎は、青年になるとその強い正義感から、鬼の恐怖から人々を救いたいと強く願うようになる。

そんなある日、朝起きるとその枕元に華麗な装飾のされた刀が置かれていた。

その夜、桃太郎の集落が鬼に襲撃される。

桃太郎は、勇気と信念を元にその刀で見事に鬼を打ち破ってみせた。

驚くことに、その刀は刃こぼれはおろか、鬼の返り血すらついていなかった。

そして、その刀の鞘には転信という言葉が光っていた。

これを機に、桃太郎は鬼討伐の旅に出る。

桃太郎の旅は大成功で、各地で名声を上げることになる。

そして、最後の目的地として鬼ヶ島に向かうことになった。

鬼ヶ島から帰還した桃太郎は朝廷に鬼ヶ島の鬼は殲滅したと報告を行った。

その翌年、拍桃姫が生まれる。

拍桃姫の母は、産後の病で亡くなった。

それから、さらに十年後、宝荒らしにより、鬼ヶ島の鬼は討伐されていないことが確認される。

桃太郎は虚偽の報告を行ったとして、朝廷の近衛師団により帝の前で処刑される。

これが、絵本には載らないももたろうの話である。

なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、・・・

拍桃姫の頭と胸は、その言葉でいつもいっぱい、すぐさま、怒りと悲しみに転化される。

さらに、その負の感情は、鬼への破壊衝動へ塑性変化する。

父様が成せなかった鬼ヶ島の鬼の殲滅、きっと私が果たしてみせる。

拍桃姫の論理思考が行き着く答えは決まっている。

今でこそ、悔し涙は出ないが、奥歯を噛み締めているのは今も変わらず。

鬼ヶ島の鬼の殲滅など容易だったはずだ、なのに、なぜ。

ハッとまた、思考が一巡していることに拍桃姫は気づく。

そして、また自分に言い聞かせる。

「それは無理だ。」

今は知り得ない亡き父様の思いなど。

「はあ、」

拍桃姫は、ため息を声に出す。

いってきます！

拍桃姫は、暖かな布団に包まれていた。

朝日が差し込み、布団が膨らむ。

拍桃姫は、意識と無意識の境界を泳ぐ。

緩やかで曖昧な淀んだ綿の世界を出来れば、ずっと楽しみたい。

拍桃姫は、切に願った。

しかし、その実にくだらない願いは、筋肉質の体から出てくるはっきりとした大声に却下されてしまった。

「こらっ！ ハク起きねえか！！」

おやっさんが細い階段から二階のハクに向かって怒鳴ってる。

なまじ、階段が細いため、余計に二階に響くのだろう。

拍桃姫は、冷静に分析した。

「破久修、鍛え終わったぞ！！」おやっさんが呆れ声で決め台詞を叫ぶ。

拍桃姫は、膨らんだ布団を足で蹴飛ばし、ドタドタと階段に向かい、転がり落ちるように一階へ向かう。

一階へ馳せ参じたハクを見て、さらにおやっさんは呆れる。

「ハク、お前髪ボサボサの服もぐちゃぐちゃじゃねえか・・・」そうぼやいた後で、おやっさんは慌てて視線を外した。

「破久修はどこ??」目を輝かせる、ハク。

おやっさんの話など聞いていない。

「それは、身支度ができてからだ、おいっ！カンナ！！ハクの髪を結ってやれ！」

ハクが目の前にいるというのに、おやっさんの音量は下がらない。

「ハクちゃん、おいで～♪」店の奥から奥さんの声が聞こえる。

待ちに待った瞬間だ。

身支度も終えた。朝御飯も食べた。

おやっさんから拍桃姫へ破久修が渡される。

深めの紺色の鞘、装飾は最低限。柄の色は、更に深い紺色、柄頭には大きな義眼が入っている。

普通の人が見れば、気味の悪い、妖刀のような雰囲気を感じるだろう。

しかし、これが拍桃姫の愛する大太刀、破久修である。

「おやっさん！奥さん！ありがとう。」拍桃姫は自然な笑顔で二人に礼をいった。

「ンフっ いいってことよ！また、いつでも来い、ハク、明日でもいいぞ！」おやっさんも笑顔で返す。

「明日ってなんなの！あんた、ンフフフフフ」奥さんも呆れながらも笑顔でハクの髪を撫でる。

「いってきます！」拍桃姫の憩いの時間が終わりを告げた。

褪せた暖簾を分け、拍桃姫は空を仰いだ。
一瞬、陽の光で目がくらむ。
それでも、頑張って瞼を開ける。
その瞳は、青い、碧い、蒼い蒼穹を捉えた。

【一章終わり】

藪通りて、一期一会

峠の街道は人通りが少ない。
しかし、全くいないかというところでもない。
数時間に一回、対向者がいる程度である。
そろそろ峠のてっぺん、お茶菓子セットが美味しい有名な店がある。
吹子屋を出てもうかれこれ半日以上、そろそろ休みたいと拍桃姫は思っていた。
向かいから旅人を思わしき人影が見える。
その口には、爪楊枝、どうやら先の茶屋で一服したらしい。
旅人とすれ違う。
旅人は異様なものを見るように拍桃姫を一瞥する。
なに、いつものことだ、拍桃姫は心の中でつぶやく。
正直、目立つのは嫌いだ。
しかし、象牙色の髪、透き通るような白い肌、華奢な体に似合わぬ大太刀はどうしても目立つ。
少し気持ちが沈んでいることを拍桃姫は自覚していた。
「よしっ」気合を入れ直し、茶屋へ走った。

ふう はあ
拍桃姫は全速力で茶屋まで走った。
おかげで、体からほんのり甘い香りがする。
「やっと着いた、ふい〜」自然と口角が上がる。
その後の、数秒の思考で上がった口角は自然と下がった。
「お金がない。」あまりに間抜けすぎて、思考は空気中へと駄々漏れた。
そうだ、忘れていた・・・。
破久修を鍛え直したということは、お茶菓子セットは3回お休みということだ。
「あ〜」情けない声を出しながら、拍桃姫は竹の長椅子に座った。

拍桃姫は、再び歩き始めた。
さすがに、何も注文せずに、休憩し続けるなど、出来ない。
小心者の拍桃姫なら尚更であった。
さらに、2時間程歩き続ける。
そろそろだ、拍桃姫は意識的に神経を尖らせる。
拍桃姫が今歩いている藪が生い茂る道は、通称、呼び人通り。
尋ね人、仇討ち、人には相談出来ぬ、只ならぬ依頼がこの藪の道でされる。
勿論、鬼退治も。
依頼人は藪に潜み、この藪道を通る旅人を物色する。
そして、依頼をこなせそうな人が見つければ、藪の中より呼ぶのだ。

「待って、待って、そこの旅人さん」藪の中から微かに聞こえる。
そらきたっ 拍桃姫の緊張は最高潮になる。
拍桃姫は、ずっと後ろを確認する。誰もいない。
拍桃姫は、声の聞こえた藪の中を進んでいく。
中には、依頼人を装った、山賊や野伏がいることもある。
拍桃姫は腰に真一文字に挿した破久修の柄を握ったまま、藪を進む。
藪が開けた。
「っ？」誰もいない。周囲を見渡す。
こういった場合は、大抵、山賊だ。

ガサッ
全集中力を右手に集約させる。
体を回転させ、その遠心力で逆手で抜刀する。
さらに左足を軸に回転力を大きくし、往なすように順手に持ち変える。
回転を一気に止める。
その全ての運動エネルギーは、藪へ伸ばされた破久修の切っ先へ集約される。

「っっ？」
手応えも無ければ、反応もない。
破久修の峰で藪を払う。

そこには、年齢7~8歳の可愛い女の子を腰が抜かし、目をうるうるさせていた。
頭には、貝で作られたであろう、綺麗な髪飾りがついていた。
続いて視線を下へ向ける。
ひざ下お尻の近くの着物が濡れている。
よく見ると、暖かそうな感じがあり、今まさに催しましたといった感じだ。

「あっ！！」
拍桃姫は、やっと、分かった。
すぐさま、破久修を鞘に収める。

「あう、ごめんなさい。」
拍桃姫も泣きたくなった。

吉備との出会い

呼び人通りを過ぎて、二人はゆるやかな坂道に向かおうとしていた。拍桃姫は、少女の歩幅に合わせて、ゆっくりと歩く。「スースーするっ！」少女は元気に言う。「ごめんなさい」拍桃姫は力無く、こぼす。少女が嫌味を言っていないことは、よくわかる。しかし、拍桃姫は、ただただ申し訳ない気持ちでいっぱいであった。藪の中で、よくわからなかったとはいえ、大切な鬼退治の依頼人に刃を向けるなどあってはいけない。ましてや、それが年端も行かぬ少女なら尚更だ。さらにさらに、そのせいで失禁させてしまうなど、土下座ものだ。

少女は、吉備という名であった。吉備の美しい黒髪は、夕日を溶かし込み、赤い輪を作っていた。「鬼退治して欲しいの」吉備はそれだけを行った。それ以上は聞き出せなかった。そのため、拍桃姫は吉備の村へ一緒に向かう。呼び人通りにこんな小さな女の子を行かせるほどだ。それほど、余裕のない切迫した状況に村が置かれているということだけは、わかった。「吉備の村へは、後、どのくらいで着くの？」拍桃姫は、二つの質問をした。「私の村は、高尾仁村って言うんよ」吉備は照れながら言う。以外にも最初に返ってきたのは裏の質問の方だった。「コオニ村かー」拍桃姫は復唱しながら、子供の鬼みみたいな名前だなと思う。「3日くらいだよー」突然、表の質問の答えが返ってきた。「・・・えっ」数秒、思考が固まる。

それから、2日、拍桃姫は吉備を背負い、高尾仁村へ急いだ。とにかく時間がないような気がした。なるべく急ぎ足で、そのせいで、足は固く貼っていた。鬼退治をしなくては。2日間、吉備と過ごして、その思いは、より強くなった。「ハクちゃん、甘い香りがする。」すっかり拍桃姫に慣れた吉備は子供らしく、感じたことを口にした。拍桃姫の体臭は、ほんのり甘い。汗ばむとその傾向は、さらに強くなる。タッタッタッと勇み足で、リズムよく、進む。

「そういえば、吉備ちゃんの髪飾り、とっても綺麗だね。」ハクは吉備が喜びそうな話題を振った。

「えへへへっ これ私のお気に入りなの、お父さんとお母さんが夜店で買ってくれたの！！」吉備もうれしそうに饒舌になる。

「そうなんだー」ハクもなんだか嬉しい。

まるで、仲の良い妹ができたみたいだ。

「鬼退治してくれたら、あげるよ！」吉備はそのままの声調で言った。

「えっ・・・」吉備の返しにはよく驚かされる。

(出来れば、お金の方がいい) 自分の下賤な思いに自己嫌悪になる。

「お父さんとお母さんからの大切なものだから大切にしなァ」自己嫌悪を払うように、お姉さんっぽい発言を試みる。

「ううん、いいの」吉備は、そう言って、拍桃姫の柔らかな、象牙色の髪に顔を埋めた。

3日目の早朝、まだ山道は暗く、吉備は背中で眠っている。

目の前の山を超えれば、吉備の村、高尾仁村だ。

結局、3日かかってしまったなと思う。

急いでいたのに、うまくいかないな、素直にそう思う。

そろそろ山の頂上、村全体が見渡せるはずだ。

最後の力を振り絞り、重くなっている吉備を落とさないように急ぐ。

「ふう〜」深呼吸する。やっと頂上だ。

見下ろし、村を望む。

太陽も顔を出し始め、鮮やかに、高尾仁村を色付け始めた。

なんて、運がいいんだ。

縁起が良い気がした。

眼下に広がった、高尾仁村の状態を見て、拍桃姫は目を疑った。

「なんだ、・・・これ。」

力無く、拍桃姫の口からポツリと一言こぼれた。

全てここで終わらせる。

拍桃姫は、瞬きを忘れていた。
山頂から見下ろす、村は・・・。
いや、村であったであろう場所がそこには、存在した。
「なんで、」拍桃姫は思いを声に出さずにはいられなかった。

拍桃姫は山を降り、高尾仁村を目指し始めた。
まだ、吉備は起きる様子はない。
私がおもって、急いでいけば、村はこんな状態でなかったのではないのか。
拍桃姫は自分を責めた。
山頂から見下ろしたところ、おそらく、村は壊滅状態だ。
仮に、生存者がいたとしてもあんな場所に長居はしないだろう。
あの惨状だ。
鬼は何匹いるんだろう。
もし、一匹であれだけのことをやったのなら、それは、まだ拍桃姫の遭ったことのない格上の鬼だ。
山を下りながら、緊張が高まりつつあった。
ただ、救いなのが、今が夜明けということだ。
鬼は、陽の出ている間は、あまり出て来ようとしめない。
理由はなぜかは、拍桃姫は知らない。
特に、格上の強い鬼であればあるほど、その傾向は強い。
そろそろ、麓だ。
拍桃姫は、立ち止まった。
あの惨状を吉備に見せるべきか、いや、隠し通せるわけもない。
拍桃姫は、覚悟し、高尾仁村へ入った。

吉備はまだ寝ている。
村の入口に寝ている吉備を隠すし、拍桃姫は村の様子を見に行った。
吉備は、眼に拍桃姫の背中を捉え、見送った。
吉備は、山頂に着いたあたりから起きていたが寝た振りをしていた。
まずは、村の様子を知ってほしいと吉備は思う。
そして、これから起きるであろうことも予想し、ポツリとつぶやいた。
「ごめんなさい、ハクちゃん。」

村の様子は、想像以上だ。
拍桃姫は、自分に言い聞かせる。

破壊された家々、四散した人の手足、臓物。

鬼の死体は見慣れているが、人のそれは見慣れていない。

正直、目を背けたい気持ちでいっぱいであった。

しかし、目を背けることは、亡き者の無念を理解する意味でもそれは、許されない気がした。

鬼とはいえ、ここまでするか、拍桃姫はそう思う。

この村の全てを破壊しよう、そんな意思さえ読み取れるような惨状であった。

鬼とは何かと尋ねられれば、拍桃姫は『破壊する者』と答える。

鬼は、およそ、意思というものは無い。

目に写ったもの全てを破壊する。

生物、無生物問わず。

破壊するためだけに存在する。

そのため、人を殺しても、食べたりはしない、さらに破壊するそれだけだ。

そして、鬼がどこから来て、どこに行こうとしているのかは、誰にもわからない。

一説には、鬼ヶ島からやって来て金銀財宝を奪い鬼ヶ島に帰るといふ人もいるが、拍桃姫は信じていない。

というのも、鬼は金銀財宝に執着しないし、鬼は破壊という行動そのものに執着していることを幾重もの鬼との戦いを通じて、拍桃姫は知っているからである。

あらかた村を見て周り、村に生存者はいないことはわかった。

拍桃姫は吉備のいる村の入口へ戻る。

吉備はもう起きているようで、火を起こして暖をとっていた。

吉備の姿を確認し、拍桃姫はわかった気がした。

どうして、あの綺麗な髪飾りを拍桃姫にあげると言ってくれたのか。

拍桃姫は吉備のもとに戻り、一緒に暖をとった。

「吉備、気分はどう？」拍桃姫はパチパチと爆ぜる火を見ながら言った。

「うん、大丈夫だよ。」吉備は、落ち着き、微笑みながら答えた。

やはり、そうだ。

吉備は、村が壊滅状態と知った上で、拍桃姫に依頼したのだ。

詳しい状況を道中話さなかったのは、壊滅状態と知れば、金にならぬと断られると思ったからであろう。

たくさんの大切なものを失った吉備の心情を思うと拍桃姫はいたたまれなかった。

「鬼、絶対倒すからね！」拍桃姫は吉備を見据え、しっかり言った。

「ありがとう、ハクちゃん。」吉備の顔は曇った。

「そうだ、鬼倒したら、私と旅に出よう。ねっ」ハクは吉備の顔を笑顔にしようと咄嗟に言った。

「ありがとう、ハクちゃ、」さらに曇った顔を見せまいと、言いかけたまま、吉備は拍桃姫に抱

きついた。

なんとしても鬼を倒さねば、拍桃姫は決意を新たにした。

3日間の疲れも相まって、眩い陽の光が照らす中、拍桃姫は眠ってしまった。
吉備は、拍桃姫が眠ったことを確認し、村の自分の家のあった場所へ向かった。

吉備は髪飾りを触りながら、かつて自分の家があった瓦礫の跡を眺めた。

「お母さん、・・・」吉備は遠い目をしたまま、独り言を始めた。

「なんで、

鬼に

なっちゃったの」

吉備はこれから起こることを覚悟した。

必要なのは、覚悟することだけだ。

出来れば、拍桃姫さんには、鬼を殺して欲しい、吉備は願った。

騙すように、ここまで来てもらい本当はないと吉備は自分の運命を呪った。

「おーい！！ 吉備い〜」拍桃姫の声が後ろから聞こえた。

「危ないでしょー！」拍桃姫の心配そうな声ははっきりと聞こえた。

「私といる限り、大丈夫。」吉備は誰にも聞かれないようにつぶやいた。

「ごめんなさい」そう、大きな声で返すと拍桃姫の出会った頃の吉備に戻った。

陽は完全に落ち、人の時間は終わった。

さて、これからだ。

拍桃姫は、戦闘欲を出す。

夜空には、月が明るく登っていた。

鬪いの利は、拍桃姫にある。

しかし、油断は禁物だ、すぐに自分に言い聞かせる。

膝で眠っていた、吉備が起きた。

「どうしたの？」拍桃姫は、優しくきいた。

「ちょっと厠、」吉備は眠気まなこなのであろう、力無く答える。

「一緒に行こうか？」心配して尋ねた。

「ううん、いい一人でできるから。」吉備は答える。

吉備はタタッと走り、火の明かりが届くか届かないかくらいの物陰へ行った。

吉備は、胸を抑えながら、走った。

もう、駄目だ、怖い怖い怖い怖い。

ハクちゃんには見せられない。

拍桃姫からは見えない、瓦礫の物陰にしゃがみこんだ。

じんわりと深淵が吉備を中心に広がる。

周囲の空間が歪む。

髪に止まった綺麗な髪飾りを触り、吉備は意識を保つことに専念しようとした。

「お母さんっ……………グスッ」薄れ行く意識の中、吉備の心に残ったもの、それは悲しみであった。

少女の心の抵抗など、無駄であった。

業に落ちた者の行き先はいつも同じ

「ぐおおおおおおおおおおお」断末魔も似た空間を裂く音波が響いた。獣でもなく、人でもなく、楽器の音でもなく、自然現象が奏でる音でもない。拍桃姫が知るかぎり、消去法で考えられるこの音源は鬼しかありえなかった。

「吉備！！」

拍桃姫は素早く抜刀し、吉備がいるであろう、闇へ走った。

鬼の破壊を目指す

拍桃姫は、瓦礫を押し分け、吉備の元へ向かう。
「吉備！」吉備はいなかった。
まさか、鬼に殺されたのか、それとも、隠れているのか。
いや、鬼はどこだ。
拍桃姫は完全に混乱していた。
拍桃姫は周囲を見渡す。
どこだ、どこだ、どこだ。
瞬間、拍桃姫は左から風が吹いてきていると感じた。
パーーン！！
彼女の華奢な体は、弾き飛ばされ瓦礫の山に埋められた。
「うう、キビ・・・」彼女は呻いた。

数分、気を失う。
左耳は、風を感じるが、何も聞こえなかった。
まずは、鬼をなんとかせねば、拍桃姫に冷静な思考が戻った。
瓦礫を押し分け、再び、大地に帰った。
左右を見渡す。
破久修は、瓦礫の山に垂直に刺さり、主人の復活を待っていた。
吉備はおそらくどこかに隠れているのだろう。
ならば、私がすることは一つ。
破久修を構え、果ての瓦礫で暴れている鬼を見据える。
大きさは、拍桃姫の倍、頭の真横から生えている角は大きく曲り、額の辺りで真っ直ぐ上に伸びていた。
瞳は燃えるように紅い。
今までに見たことのない、鬼だ。
自分の中の恐怖心を押し殺し、目の前の鬼を殺めることだけに集中する。

「うああああああああああ！！」拍桃姫は奮い立たせるように鬼に吠えてみせた。
一瞬、暴れている鬼の動きが止まる。
紅い瞳が拍桃姫を捉えた。
「ぶおおおおおおおお！！」鬼が拍桃姫へ壊意を向ける。
鬼は、瓦礫を押し分け、憤怒し突進してきた。
「さあ、来い！」拍桃姫は破久修を構え、刃の向きを確認する。
地鳴りが近くなる。
「いち、に、さん、 いち、に、さん」拍桃姫は拍動を心の中で刻む。

「ぐおおおおおお！！」鬼が巨大な腕を振り上げる。

「にっ！」拍桃姫は正確に鬼の動きに合わせて、破久修を撫で当てるように調整する。
その瞬間、鬼の腕が止まった。

拍桃姫は、自身の思考速度が上昇したのかと思ったがそれは間違いであった。
即座にもう一方の巨腕が拍桃姫を襲う。

ガンッ！

跳ねるようにまた、吹き飛ばされる。

腹部に鈍痛と鋭痛を感じたが、この痛みを深追いしないことにした。

「まさか、誘い受け斬りを見破られるとは。」拍桃姫は思考を整理するためにも口に出した。
ならば、残された選択肢は一つであった。

消耗も激しく、残された時間もわずかしかないように思えた。

すぐさま、飛び起き、破久修を握り、鬼へ向かった。
不思議と普段は重く感じる破久修が軽く感じられた。
すり足で一気に、距離を詰める。
鬼の巨腕が、横殴りしてくる。
今度は二の轍を踏まないように、鬼の体全体に気を配る。
タンッと地面を蹴り、拍桃姫は鬼の腕に乗る。
鬼の右腕を登り走り、鬼の頭部へ向かう。
急所の一点突破、これしかない。
鬼首筋に近づき、破久修で撫で斬った。
おびただしい血が宙に咲く。
「がああああ！」鬼が叫ぶ。
一旦、鬼から離れ、距離をとる。

鬼は完全に混乱し、周囲に無駄な攻撃をした。
あと、一太刀、そう確信し、鬼へ再び向かう。
突然、鬼が垂直に高く飛んだ。
啞然とし、一旦、その場に立ち止まってしまった。

ドン！！

鬼が大地に戻ってきた。

巨大な衝撃で、拍桃姫は瓦礫ともども空中に打ち上げられてしまった。
鬼は、巨腕を振り、空中に浮かんだ、瓦礫を拍桃姫に向かってはじき飛ばした。
空中で身動きの取れない拍桃姫を瓦礫の散弾が襲う。

「しまった！！」

絶命

無数の瓦礫が散弾となって、拍桃姫を襲う。

拍桃姫は、自分と一緒に打ち上げられた、周囲の瓦礫を見渡す。

「何か、盾になるものはないのか。」拍桃姫は限られた刹那の時間、必死に探した。

運良く、自分の右上に半分になった引き戸があった。

「間に合ええー」拍桃姫は、引き戸を盾に散弾から身を守った。

瓦礫の散弾の嵐を終わり、地面が近くなる。

盾で散弾を防ぐということ、言い換えれば、それは、視界が無くなるということである。

拍桃姫はそのことを完全に忘れていた。

やっと、地面に戻る、そう思った時、三度目の鈍い衝撃が体に走った。

巨腕によって与えられた運動エネルギーは、地面に叩きつけられることにより、消費された。

「うぐうええええええ」拍桃姫は血液とも体液とも形容しがたいものを吐瀉した。

「はあ、はあ」息をするだけでも辛い。

視界が白黒になる。

ぼんやりと焦点の定まらない視界の中、鬼が突進してきていることだけはわかった。

「もう、最後にしよう」拍桃姫はそう思った。

殴られ、弾き飛ばされてもなお、破久修を離さなかった自分を褒めたいと拍桃姫は思った。

「ごめんね、破久修。」拍桃姫は愛刀を見る。

「ううああああああああああああああああ」拍桃姫は叫び、破久修を鬼の首筋へと投擲する。

一線と破久修は、鬼の首のど真ん中に刺さった。

「ごああああああ、ゲボゲボグボ・・・」鬼は泣き叫ぼうとしたが、それを破久修が拒む。

鬼はすぐさま、中途半端に刺さった太刀を引き抜こうとした。

しかし、鬼は一瞬躊躇してしまった。

鬼は、見てしまったのだ、瞳を緋色に燃やし、自らに迫進してくる白い化け物を。

拍桃姫は、鬼へ突進し、体全体を使って、破久修を完全に鬼の首へねじ込んだ。

完全にねじ込まれたことを破久修を伝えて返ってくる反作用を通じて確信した。

声の出ぬ鬼が大きな腕を使い、拍桃姫諸とも、引き抜こうとする。

巨大な手が拍桃姫を締め付ける。

「くっ うう」拍桃姫は痛みを感じたがその痛みは薄れつつあった。

おそらく、生死の境界なのであろう、痛覚神経の入力が断絶されつつあった。

鬼は顔の前の拍桃姫を引き離そうとする。

その過程において、何度も拍桃姫の美しき象牙色の髪が鬼の顔を撫でた。

鬼は、怒りと痛みの中、目の前の白い化け物から香る、甘い香りに、記憶を呼び戻されそうになっていた。

『どこかで、この薄い甘い香りを嗅いだ、 そう・・・

それは朝日に照らされた、大切な私の村を見ていたとき、

思い出した・・・ 私は、・・・』

「うおおおおおおおおお！！」拍桃姫は固く握った破久修を横一閃に押し切った。

バシャアアア

おびたらしい血が拍桃姫を真っ赤に染める。

拍桃姫は自身を抑えつける大きな手から力がなくなっていくことを体全体で感じた。

巨大な体が、地面へ崩れた。

拍桃姫も地面へ戻った。

拍桃姫はトドメを指すために、力無く倒れた鬼の首へ向かう。

まだ、頭部と四肢が首の肉塊で止められていた。

鬼が絶命していることは確かだが、拍桃姫はその肉塊を縦一閃に分断した。

破久修を振り下ろした後、一気に体から力が抜け、その場に座り込んでしまった。

目の前には、鬼の頭部。

拍桃姫は鬼の両目以外に目を照り返すものがあることに気づいた。

何だ？、破久修を使い、鬼の左側頭部を探る。

そこには、鬼には似つかわしくない綺麗な貝でできた髪飾りが、太い髪に止められていた。

拍桃姫は一瞬、わからなかった。

しかし、どう見てもこれは、髪にしっかり止められている。

人の手で付けられたものだ。

しかも、これは吉備がしていたものと同じだ・・・。

拍桃姫は瞬間、目の前が真っ暗になる。

背筋におぞましい黒冷水が走るのを知覚した。

「うわぁ・・・・・・・・・・ああああ、はっはぁ」

後悔などという言葉では表現できぬ程の感情の波が心を満たした。

たった今、殺した鬼は吉備だったのだ。

明かされる世界の公理

朝日が瞼越しに網膜に届いた。
ゆっくりと上体を起こす。
昨夜の鬼の遺体は消えていた。
左手に、違和感を感じる。
拍桃姫はそっと、握られた左手を開く。
そこには、貝でできた美しい髪飾りがあった。
そして、自分が吉備を殺してしまったことを思い出した。
まだ、心のどこかには、あれは吉備ではなかったのではないかという淡い願いがあった。
自分の服を見る。
真っ黒な血の色で、拍桃姫の白い服は、染められていた。
ふー。
深呼吸をする。
「つつつ！！」全身に激痛が走る。
深呼吸などすべきではなかったと後悔する。

ふとっ後ろに人影があることに気づいた。
驚いて、後ろを振り向く。
「やっ！！」そこには、にこやかに愛想よく声をかける青年がいた。
「だれ？」拍桃姫はキッと青年を睨みつける。
「僕は、和瀬朱。よろしく！」和瀬朱は変わらぬ笑顔で答えた。
「君の鬼退治見てたよ。拍桃姫！」和瀬朱は、続けて言う。
馴れ馴れしいし、私の寝顔を見たのか。なんて男だ。
拍桃姫は、そう思う。
男の腰には、不思議な形の太刀が刺さっていた。
よく見ると、衣服の不思議だ。
腰には、帯ではなく、革のようなものを巻いている。
「じ、じゃあ、なんで加勢してくれなかったの？」拍桃姫は思ったことをそのまま言った。
「悪いね、僕は鬼退治出来ないんだ。僕は鬼に成りたくないからね。」和瀬朱はさらりと言う。
二言目の意味がわからない。
「鬼に成りたくない？」拍桃姫は反復する。

「ああ、僕は鬼に成りたくないからね。」和瀬朱は、無意味な反復をする。
「えっ君はまさか、知らないのかい？」拍桃姫のイラ付いた顔を見て、慌てる。
和瀬朱は静かに、語り始めた。
「鬼を殺した者は、鬼になるんだよ。」

「・・・」拍桃姫は、絶句してしまう。

そんな話は聞いたことはない。

拍桃姫は一気に混乱する。

それでは、鬼の数は減らないではないか。

なら、なぜ、私は鬼にならないんだ。

吉備は、どこかで、鬼を殺したということなのか。

頭の中で疑問がいっぱいになった。

「混乱してるねえ」和瀬朱は、嬉しそうに言う。

「じゃあ、ひとつずつ答えるね。」和瀬朱はゆっくりとしゃべる。

「鬼を殺せば、鬼になる。

そう！鬼の数は変わらないんだよ。

ただね、ある種の人間は鬼殺しをしても鬼にならないんだよ。

おそらく、君がそうなんだろう、知らないけど。

そして、君が殺した鬼も、どこかで鬼を殺したんだろうね。」和瀬朱はすらすらと答える。

「えっ、」拍桃姫は別の困惑をする。今、私は疑問を口にはしていなかったはずだ。

「混乱ついでに、革新に触れようか、拍桃姫！」和瀬朱は、もう止まらない。

なんなんだ、こいつ、拍桃姫は気味が悪く仕方がない。

そして、今更、なんで私の名を知っているんだと更に嫌悪感が強くなる。

拍桃姫の疑いの目を遮るように和瀬朱は続ける。

「どうして、あの髪飾りの女の子が、この誰もいない村に君を連れてきたと思う？」和瀬朱は真顔になる。

「あの子は、鬼である自分を受け入れ、わかった上でここで退治してもらおうと決意したのだと思うよ。」和瀬朱は拍桃姫をじっと見据える。

拍桃姫は、グッと拳を握る。

そして、拍桃姫は、拳の中の髪飾りが吉備の最後の願いだったことに気づいた。

血液を含んだ赤い涙が、頬を伝う。

止まらない、涙が、止まらない。

いや、この涙は止めたくない。

拍桃姫は、そう、思った。

吉備はどれほどの思いで、自分を殺して欲しいと願ったのだろうか。

彼女は自身を否定し、世界を守ることを選んだのだ。

「おっと、しゃべりすぎたね」和瀬朱がまた笑顔になる。

「君とは、また、会えるような気がするよ。」和瀬朱は捨て台詞のように言った。

「ちょっと、待って、まだ聞きたいことが・・・」拍桃姫は叫ぶ。

この人は、知っている。鬼とは何か、そして、私が何者なのか。

たった今、そこにいた、和瀬朱がいなくなっていた。

「えっ・・・」拍桃姫は再び、地面に寝転がった。

そして、自身の体から痛みが消えていることに気づいた。

太陽が真上に上がり、高尾仁村を照らしていた。

拍桃姫は、破久修の手入れをして、村の入口へ向かい、旅立とうとしていた。

和瀬朱が何者なのか、それは、もう思考しても無駄だと思った。

ただ、今は、吉備の思いと願いを受け止めるだけでいっぱいいっぱいであった。

吉備を背負い、下った山道を今度は、一人で登る。

しかし、拍桃姫の美しい象牙色の髪には、貝で出来た綺麗な髪飾りがしっかりと止まっていた。

ふたりは、いっしょだ。

【にの記終わり】

溪流にて、心と体を清める

拍桃姫は、苔に覆いつくされた丸岩に腰掛けていた。
足には、冷たく清らかな、溪流が流れている。
その溪流は透明ではなく、僅かに朱に染まっていた。
それは、上流で血に染まった着物を洗っているからだ。
風は、殆ど無いが、暑くはなかった。
森の木々から生まれた酸素が、夏の太陽の紫外線を浴びて、オゾンへと変化していることを嗅覚が察知していた。
溪流の木漏れ日に拍桃姫の美しい純白の体は照らされ、僅かに桃色に反応する。
拍桃姫は、滝の下にある大きな水たまりに歩く。
「すう〜」大きく空気を肺に貯めこむ。
意を決して、飛び込む。
体の表面の温度変化信号は脳に集約される。
(冷たい・・・)
体全体の温度が下がるに従って、思考も明晰になっていった。
ここ数日の拍桃姫の脳の話は、吉備の件ばかりであった。
「鬼は人が変化したもの」
「鬼を殺せば、鬼になる。」
「私は鬼を殺しても鬼にはならない」
私は何者なのだろうか。
また、思考がもつれはじめていることに気がついた。

「これから、どうしよう。」拍桃姫は、溪流に見を任せたままつぶやいた。
また、呼び人通りで、依頼を受けるべきか。
いや、行きたくない。拍桃姫は、そう思った。
吉備と拍桃姫を繋ぎとめるのは、この髪飾りだけで十分だ。
呼び人通りに戻ることは、過去に戻るような気がして、なんだか嫌だった。
「ふう〜」こういう時は、深呼吸に限る。
拍桃姫はそう思う。
思考に明晰さが戻ってくる。
まずは、鬼ヶ島に行くべきだろうか。
今まで通り、鬼を退治していても埒があかない。
やるのなら、本丸を叩くべきか。
拍桃姫は自問自答をした。
ただ、鬼ヶ島の鬼を退治しても、本当に意味のあることなのか、甚だ疑問でもある。
しかし、迷って、立ち止まっても仕方がないことも事実だ。

迷うくらいなら進むべきだ。

拍桃姫は自分自身の変化に気づく。

今までの自分なら、こんなことは考えず、ひたすら、迷っていたはずだ。

吉備との一件で、精神的に成長したということなのだろうか。

鬼ヶ島に行くのなら、準備をしなければ。

思考は次を目指していた。

一番の懸念は、今まで一緒に闘ってきた破久修だ。

戦い方次第でもあるが、だいたい、鬼を二～三匹を狩れば、刃がボロボロになり、悲鳴を上げてしまう。

どう考えても、鬼ヶ島の鬼が数匹なはずがない。

武器の調達、もしくは破久修の改良が必要だ。

どうしたものか、思考は簡単に結論を出すか、現実的には、そのための資金が必要だ。

どうしよう。

「はあ～」思わず、ため息が言葉になる。

ああ、いつもの自分が戻ったな、そう思う拍桃姫であった。

霧深き中、すすむ

拍桃姫は、霧深い森林を彷徨っていた。

迷ってても仕方なしと溪流を出てから気がつけば、一端の迷い人となっていた。

道らしきをとこを歩いていることはわかったが、それが獣道なのか、人道なのかわからなかった。

空を仰ぐ、昼なのか夜なのか、霧が深すぎてわからない。

どうしようと、途方に暮れつつ、ふとあることに気づく。

生まれて初めて、道に迷っていることに。

これまで、数年旅を続けてきたけれども、道に迷ったことなど、初めての経験だ。

んんぐううううううう～

下腹部から、燃料補給要請信号が鳴っている。

ああ、そういえば、ここ数日、ご飯らしいご飯を食べていない。

なんだか、今日は気づくことが多い。

仰ぐ。

夜になったらしい。

昼とは違う、夜の霧の世界が広がっていた。

昼とは、違うなあとしみじみ思う。

このまま、野垂れ死んだら、どうしよう。

今更、迷った時点で気づくべきことに気づいた。

「いや、ほんとに、今日は気づくことが多い。」拍桃姫は、自分の思考が明らかに低下していることに気づいていなかった。

「どうしよう。」いつもの癖で思考が口から漏れる。

ただ、ひたすら歩く。

鬼、鬼、鬼を殲滅せねば・・・。

極限の中、拍桃姫の最優先事項のみ思考はいっぱいになった。

思考は、線形から離散に切り替わりつつあった。

そして、離散から虚になり、拍桃姫は意識を失った。

二人の若い男女は、山菜取りの中、色白で象牙色の髪をした少女が倒れていることに気づいた。

「ねえ、来て！ 女の子が倒れてる！！」女性は、叫んだ。

「えっ？」驚きつつ、女性に男性が近づいてきた。

可愛らしい少女に似つかわしくない、大きな太刀。

異様な雰囲気二人は感じてた。

そっと少女に耳を近づける。

どうやら生きているらしい。

「ちょっと、近づきすぎ！」女性が男性の肩を持ち、無理やり引き離す。

(やれやれ・・・) そう思いつつ。

男は振り返って、女に言う。

「生きてるよ。村に連れて帰ろう。」

鬼灯垂れて葉月

(寒い・・・)

拍桃姫は薄い布団の中、そう感じる。

これを底冷えするというのだろう。

拍桃姫の脳は無意識から意識へ切り替わりつつあった。

！！

「というか、私はなぜ、布団の中なんだ！！」拍桃姫は布団の中でつつこむ。

私は、道に迷って、途方に暮れて、・・・それで、・・・それで、どうなったんだっけ？

脳の中で記録が途切れている。

恐る恐る布団から顔を出す。

布団以外、何も無い・・・そんな部屋が周りに広がっていた。

そういえば、破久修はどこだろう。

何も無い部屋を見渡す。

何も無い部屋だから、当然ながら破久修も見当たらない。

布団をひっくり返し、探すも破久修はいない。

拍桃姫の頭は一気に混乱する。

愛刀を失った悲しみと武器を取られ窮地に追いやられている状況は拍桃姫をさらに追い詰める。

取り戻さねば、不安を取り除くためにも。

拍桃姫は意を決して、部屋を出る。

引き戸を開けたその先には、至って普通の庭が広がっていた。

そして、その庭には、鬼灯が赤い提灯を作っていた。

その淡い赤色に、意識が奪われてしまう。

チャッ・・・

奪われた意識は聞き覚えのある金属音によって戻って来た。

破久修を抜刀した時の音だ。

私の破久修を奪った者が近くいる。

早く取り戻したい、しかし、抜刀されたということはまずい状況になったということでもある。

恐る恐る、音のした方向に廊下を進む。

その廊下の先に囲炉裏の色を投影した障子があった。

一瞬、見覚えのある影が障子を横切る。

破久修だ。

確実にあの部屋にいるはずだ、私の愛刀、破久修を持っていった者が。

この距離ならまだ、私の存在は気付かれていないはず。

そう思った瞬間、透明だが、ひどく突き抜ける、声が障子から聞こえてきた。

「あら、起きたの 入って来て！」

なぜ、気付かれたのか不思議に思いつつ、警戒しながら障子をゆっくり開けた。

囲炉裏の向かい側に拍桃姫より、少し年上と思われる女性が座っていた。

「まあ、寒いでしょう。早く、こちらにおいで。」脳髓にズンと響く高音だ。

拍桃姫は素直に従い、囲炉裏の前に座る。

女性の容姿がより鮮明にわかる。

薄く白に近い、灰色の髪が肩まで伸びていた。

瞳は、薄い桃色であった。

まるで、自分が目の前にいるようだった。

女性は、拍桃姫の驚いた顔を見て、微笑んでみせた。

「私たち、似てるね♪フフ、私は、否戯（いなぎ）。」高い声が響く。

「私は、拍桃姫って言います。あの・・・ その太刀返してもらえませんか。」拍桃姫は最低限の紹介と希望を述べた。

「ああ、ごめんなさい、人が作ったにしては、良いモノだったんでね。つつい・・・」否戯の微笑は変わらない。

（人が作った・・・？ 人以外に誰が刀を作るのだろう・・・）変な言い方だと思う。

「でも、コーティングは流石にされてないね。」否戯は、言いたい事だけ言っている、そんな印象を与えた。

「こーてんぐ??」拍桃姫は、不明な単語を復唱する。

「あー、気にしないで。フフ」否戯は、その返事が返ってくることをわかっていたかのようだった。

そう言うと、否戯は、破久修を返してくれた。

「道で気を失っていた、あなたをここまで連れてきたの、大変だったわぁ」別に嫌味っぽくは聞こえない。

「あっ、ありがとうございます。 道に倒れていたんですか。」拍桃姫は命の恩人に感謝せねばと思う。

「起きたばかりで、まだ寒いでしょう。 火、強くするね。」否戯は、気を使ってくれる。

「あっ、私がかべます。」拍桃姫は、薪を手取る。

「ごめんなさいね、薪を使っているなんて、珍しいでしょ。」否戯は、恥ずかしそうに言う。普通は煙の量の少ない、木炭が好まれる。

しかし、そんなものは、客が来ない限り、使われない。

また、余裕の無い家庭や、客がまず来ない家では、そもそも木炭など置いてないことが多い。おそらく、否戯の場合、後者であろう。

「いえ、私もいつも、薪でし・・・・・・・・・・・・・・・・」拍桃姫は笑顔で返事し、途中で言葉に詰まってしまう。

私が今、右手に持っているものはなんだ。

なんで、薪を囲炉裏にくべようとしているんだ。

なんで、庭に、鬼灯が赤くなっているんだ。

なんで、寒いんだ。

今は、葉月（八月）だぞ！！！！！！

拍桃姫は、気付くべきことに気付いた。

今は葉月だ。

それなのに、この寒さは霜月並だ。

拍桃姫は、この疑問を素直に否戯にぶつけた。

「ああ、この村の人たちは強すぎる日の光が嫌いなの。」否戯は、さらりと答える。

「だから、この村の上空に高密度の大気層を作り出し光量を減らしてるの。だから、寒い。」意味不明な補足まで付いてきた。

「はあ、そうなんですか。」拍桃姫は、無理やり納得した。

それから、一頻りお話しした後、お昼ご飯を食べた。

その中で、拍桃姫が鬼退治の旅をしていることを話になった。

「そう・・・、それは、過酷な運命ね。」否戯は、囲炉裏に目を向けたまま呟く。

(何故、我々が悪しき者を討たねばならないのか。本来であれば、関係の無い我々が。)

否戯の胸には、忌々しき一族に背負わされた運命が想起された。

「あなたなら、終わらせられるかもね。」否戯は優しく微笑む。

「ありがとうございます。」拍桃姫もそれにこたえる。

「では、そろそろ出ます。今までありがとうございます。」拍桃姫は腰を上げる。

「ちょっと待って、今のままで、旅は続けられると本当にお思い？」否戯は、少し慌てる。

「今のままでは、あなたの太刀は、死ぬ。」語尾が強調される。

「すなわち、あなた（と我々）の悲願は成し遂げられない。」拍桃姫は黙って耳を傾ける。

「でも、こればかりは・・・」拍桃姫の表情が曇る。

「なんとかなるし、なんとかしてあげる。」否戯の顔が、自身に溢れる。

「えっ　でもどうやって・・・」拍桃姫は、ぽつりとかぼす。

「たぶん、わからないだろうから詳しい説明はしない。簡単に言うと、あなたの太刀に構成原子の循環機構を作ってあげる。」拍桃姫にとって、全然簡単な説明ではなかった。

「まあ、今以上に刃こぼれしにくくなるし、鬼との戦いならば、折れることも欠けることもなくなるよ。」否戯は、拍桃姫の困った顔を見て、結果だけを伝えた。

「ただし、それがどういうことかわかる？」否戯は、拍桃姫を試す。

「ええ・・・」拍桃姫は答えられない。

「即答できないようではダメよ。もう答えを言ってしまおうけど、つまり、今までは、鬼との戦闘において、破久修がその身を削ることによって、斬撃の衝撃を抑えていたの。だけど、この改修が終わった後は、衝撃は全てあなたの体が受け止めなければならない。もしかすると一太刀振るうことによってあなたの体が耐えられず、骨を折ったり、四肢を失うかもしれない。そして、それだけの覚悟があなたにお有り？」否戯の表情は芯と真っ直ぐである。

「あります。」拍桃姫は、しっかりと応える。

「その返事、待ってた。」否戯の表情が元に戻る。

拍桃姫は薄霧の村を一人歩く。

肌寒いといえはそうだが、すごしやすいと思う。

体は、この不思議な気候に慣れつつあった。

「まあ、改修するのは私じゃなくて、私の彼がするから。」話の最後に否戯はさらりと答えた。

否戯がしてくれるんじゃないの！拍桃姫は突っ込みたかった。

というわけで、その彼の家に、破久修を持って行く途中である。

村を歩くが、あまり村人とはすれ違わない。

すれ違って、一瞥するだけで、もの珍しそうに見られたりもしない。

不思議な感覚だった。

拍桃姫はどこにいてもその髪、瞳、肌の色から変な目で見られてきた。

でも、この村だけは、どの住人も拍桃姫とよく似た容姿をしており、珍しいものでもないようであった。

「そろそろ、着くはずなんだけど」拍桃姫は歩きながら呟く。

ガサガサ

「わあ」女性が突然飛び出してきた。

「うわあああ！」拍桃姫は驚き、尻餅をつく。

「びっくりした？ねえ？」女性は、目を丸々として尋ねる。

「は、はい」拍桃姫は答える。

「旅人さんだよね？不思議な髪飾り付けてるね？」女性は質問を次々とぶつける。

「え、あ、はい。ありがとうございます。」拍桃姫も律儀に答える。

「私は、九路星。これから、どこに行くの？」九路星の質問には脈絡などなかった。

「私は、拍桃姫です。えーと、工粋さんの家です。」拍桃姫は行き先をばらす。

「そうなんだ。フフっ じゃあね。」九路星はそう言うと笑顔で去っていった。

「何だったんだろう。」拍桃姫はこぼす。

拍桃姫は圧倒されてしまい、気付くべき、九路星の瞳の堕ちた濁りを見逃していた。

ここのはずだ。

工粋さんの家。

戸を叩く。「ごめんください。」

「ああ、いらっしゃい。拍桃姫さんだね。」戸の向こうから声が聞こえる。

「お邪魔します。」拍桃姫は挨拶をして家に入る。

「話は否戯から聞いてるよ。」工粋は優しく微笑む。

なんて優しそうな彼氏さんなのだろう。拍桃姫はそう思った。

パリッとした性格の否戯さんと優しそうな工粋さん。

少し二人が羨ましく思えた。

「早速とりかかるから、太刀を見せて貰えるかな。」工粋が言う。

工粋はじっくりと破久修を見る。

「面白い戦いをしてるね。」工粋は笑いながら言う。

「そうですか？」拍桃姫は太刀を見るだけで戦い方がわかるのか疑問だった。

「あの、それより破久修にどんなことするんですか。」拍桃姫は聞きたいことを先に聞いておくことにした。

「ああ、CIMOL処理さ」工粋は答える。

「しーもる処理??」この人も否戯と同じ呪文を使う人なのだろうか。

「相補的絶縁多種酸化積層膜処理のことさ。」工粋の解説は、ちっとも解説にはなっていなかった。

「何度も、薬液につけるだけさ。別にこの太刀に変な細工はしたりしないよ。」返事の無い拍桃姫のためにすることだけを簡単に説明する。

「そうなんですか。」拍桃姫は硬直から意識が戻ってきた。

「まあ、数日かかるから、今日は否戯のところに帰りなさい。」工粋はゆっくりと話した。

「わかりました。あの、また明日も来ていいですか？」拍桃姫は、ドキドキしながら聞いた。

「ああ、いいよ。」工粋は優しく微笑む。

拍桃姫は、否戯の家に歩いて帰る。

ふと、気がつく。

なんで、工粋さんは、私が来るって知ってたのだろう。

よく考えれば、話を通しておくも何も、いつ否戯さんは私のことを工粋さんに言う機会があったのだろう。

不思議な村だ。

Complementary Insulated Multiple Oxide Layers

しーもる処理とやらは数日で終わるらしい。

今日の午前にお話を聞いた感じでは、明日の午後には終わるらしい。

工粋さんに処理途中の破久修を見せてもらったが、全く変化はなかった。

「まあ、明日を楽しみにね。」工粋はそう言った。

次の日

否戯と共に工粋の元へ行く。

時は、正午間近、本来であれば、うだるような暑さのはずだが、肌寒さすら感じる。

「工粋来たわよー！ご飯食べましょう！！」いつもより否戯の声調が高い。

玄関を開けるが、工粋はいない。

「あれ、おかしいな。作業場かな。」否戯は、知った風で奥に向かう。

拍桃姫も続く、一瞬、鼻を何かを刺激した気がした。

なんだろう。しかし、もうそんな匂いは消えていた。

作業場に付き、否戯が扉を開く。

「あう」突然立ち止まった否戯に拍桃姫はぶつかってしまう。

「あの、どうしたんですか」拍桃姫は頭をこすりながら、作業場に目をやった。

「っっ！！！！！」

絶句した。息をすることも辛かった。

そこには、ずたぼろに引き裂かれた、工粋がいた。

絶命していることなど、確かめるまでもなかった。

「なんで・・・ いやああああああああああ」否戯が錯乱し泣き叫んだ。

拍桃姫は、作業場を後にしつつ、否戯を居間へ連れていった。

否戯は、何もない天井をみて、震えた。

悲しみは、直ぐ様、怒りに転化された。

誰が、こんなことを。

しかし、すぐに、自分たちが危険な状況に置かれていることに気付く。

アレだけのことをやった奴がいまだ、ここにいる可能性さえあるのだ。

「とりあえず、外に出ましょう。」拍桃姫は否戯に提案した。

「え、ええ、そうね」否戯は、弱々しくも答えた。

もう、状況を理解しつつある、なんて強い人だ、拍桃姫は素直にそう思う。

否戯が玄関を開け、外に出る。

その一歩目を出した瞬間、一瞬の閃撃が拍桃姫の目に写った。

「危ない！」拍桃姫は叫んだが、間に合わないことは明白であった。

血しぶきが舞う。

「うがぁ、あぁ」否戯が呻く。

すぐに、否戯を居間に引き戻す。

右腕の一部と腹部を切られていた。

しかし、浅い。これなら、大丈夫だ。

否戯を寝かせ、拍桃姫は、外に飛び出した。

「誰だ！！！！」拍桃姫は、許せなかった。

その思いだけが思考を支配しつつあった。

「フフっ、私は今、二つの間違いをした。」聞き覚えのある声がした。

「一つ、斬る相手を間違った。」

「二つ、踏み込みが足らなかった。」

拍桃姫の前にあの女がいた。

冷たいなにか

「フフっ、私は今、二つの間違いをした。」聞き覚えのある声がした。

「一つ、斬る相手を間違った。」

「二つ、踏み込みが足らなかった。」

そこに、九路星がスッと立っていた。

手に、血の付いた刀を持ち、その背中には、幾本もの刀が担がれていた。

「貴女が、やったのか！！」体の芯から声が出た。

「だから、今言ったじゃない。 斬る相手を間違い、踏み込みが足らなかったと・・・。」
九路星は呆れるように目を瞑り、吐き捨てる。

「死んでね、フフっ」九路星の刀が拍桃姫へ向かう。

拍桃姫も破久修を構えようとしたが、途端に工粋さんに預けたままで持っていないことに気がついた。

慌てて、距離を取る。

刀は、太刀に比べ軽いため、判断が遅れると一気に四肢を切断される。

ビュッ ビュッ 一閃一閃が空を斬る音がする。

恐らく、九路星は、身体能力はそれほど高くない。

距離と見切り時間を誤らなければ、斬られることはない。

一閃を避けることで思考は、フルタスクであった。

「さすがに、歴戦の鬼退治さんね、フフっ」九路星が笑う。

「どうして、工粋さんを殺したの！？」拍桃姫は怒りをぶつけた。

「理由なんてない。」恐ろしく冷たい声で彼女は答えた。

それはバルクメタルに手を触れるような感じであった。

右腕と腹部からくる痛み信号は、わずかであるがフィルタリングされてきた。

戸を開けたとき、目に写ったのは、確か村はずれに住む九路星とかいう女だ。

つい数分前の、光景を脳内で再生する。

そして、その手には、刀を持ち、斬りかかられた。

状況から察するに、彼を殺したのは、あいつ。

左手で腹部を抑え、作業場へ向かう。

右腕からも血は溢れ続けたが、それどころではなかった。

「あの娘に届けなければ、破久修を。」

再び惨劇の場へ、入る。

当たり前だが、彼はまだ、そこにいた。

彼女の心の中には、どんな感情もなかった。

悲しむのは、後でいい。今は、あの娘を相方を探さねば。

「工粹、もう少し待っててね。」彼女はそれに微笑んで見せた。

背に隠すは 咎の数

どこ？

「どこに置いたの、工粹！」

否戯は、必死に拍桃姫の相方を探していた。

彼女は、工粹の血しぶきを浴びた、道具をかき分けた。

破久修を探しながら、否戯は、あることを思い出した。

そういえば、・・・

あの娘をおぶってこの村へ向かっているとき、工粹はすごく嬉しそうな顔をしていた。

普段は、ふにゃふにゃして、気力なさそうな感じなのに。

あの時だけは、なんていうか新しいおもちゃを与えられた子供のように、瞳が輝いていたように思えた。

それは、夕映えを彼の瞳が反射していただけではなかった。

雑然と工具や薬品が置かれた作業場を探しても破久修は見つからなかった。

彼女は、おもむろにそれに近づき、その頬に右手を添えた。

その右手には、粘度の高い血が転写される。

「ねえ、工粹、あの娘の大事な太刀、どこに置いたの。」

「お願い答えて・・・」彼女はその答えが出てこないことをわかっていたが聞かずにはいられなかった。

「・・・」彼女は、それに口づけをした。

それはいつもの感触であったが、ただ体温は感じれなかった。

「あなたと私の関係は、九路星に終わらされたけど、・・・」

「あの娘の未来だけは、まだ繋げてあげたい。」

だからこそ、あの娘の太刀の強化をしてあげたんだもんね。

ああ、ダメだ。

温かい液体が頬を撫でる。

泣くのは、後にしようと思っていたのに・・・。

「このままじゃ、あの娘が死んじゃうよお！！ 工粹！！」

彼女は、それに抱きついた。

その時、壁にもたれ掛かっていたそれは、彼女と一緒に床に倒れた。

思わず、びっくりして、否戯は起き上がる。

壁に小さな縦穴を見つけた。

刀の振り方、重心の置き方、どうみても闘い慣れていないことは明白であった。

破久修を持たず、丸腰という圧倒的不利な状況は変わらないものの、わずかであるが光明は見え始めつつあった。

十数本の刀を背負い、九路星は、刀を無軌道に振り回し直進する。

「んう、疲れてきちゃったっ フフっ」九路星は元気よくしゃべる。

まったく疲れてそうには見えない。拍桃姫はそう思った。

「このままじゃ、埒があかない。」拍桃姫は思考が声に出てしまった。

「そりゃ、避けてるだけじゃ、埒はあかないねえ。」九路星は嬉しそうにこたえる。

「どうするのぉ」九路星が切っ先を拍桃姫の方へ向け突撃する。

「1 2 3 1 2 . . . 」拍桃姫は、拍を刻みながら、突撃する九路星の方へ走り出す。

「フフっ終わりなさい！！」九路星から笑顔が消える。

「さぁっん！！」拍桃姫は声に出し、寸前のところで、跳躍した。

「なっ！」九路星には頭上を回転しながら超える拍桃姫をしっかりと捉えていた。

しかし、捉えているだけで、運動量のついた自分を変化させることはできなかった。

「こうする！！」拍桃姫は、直下に九路星を捉えつつ、背中の刀束から、一本の刀を抜き去った。

「お前え！」九路星の顔から余裕がなくなる。

着地の後、すぐに後ろの九路星の方へ、向かう。

「埒が、あかないから刀を奪った。」拍桃姫は、わざと丁寧にとたえた。

(これからだっ)

拍桃姫は、反撃攻勢に出るために、自分を引き締めた。

九路星の背中に担がれていた、刀。

鞘の先端が尖り、釉薬でも塗られているのだろう、黒光りしていた。

抜刀すべく、左手に鞘を右手に柄を持ち、力を入れた。

九路星の刀越しに九路星を捉えつつ抜刀しようとした瞬間。

九路星の表情がまた、余裕のある穏やかな顔に戻っていた。

「えっ」その違和感を感じた瞬間右半分の視界に血しぶきが飛んだ。

そして、直ぐ様、痛覚信号が脳髄へと伝わる。

「ああああああああ！！！」

痛い、痛い、だけど

「うがああああ！　っああ・・・」

痛覚信号は右手から来ていた。

柄を持った右手に目をやる。

拍桃姫の美しく白い手に似つかわしくない黒い棘のようなものがあった。

あろうことか、その棘は、手を突き破っていた。

そして、その周りから赤い血が出ていた。

「ふふっ　残念でしたっ」優しくも冷酷な微笑みを拍桃姫に見せた。

「この状況であなたが、私の刀を奪うことなんて予測しているにきまつてるじゃない。」

「人の思考と選択肢、そこに確率を入れれば、私にはあなたが死ぬ未来しか見えない。」

「ふふっ　さあ決められた結論へあなたを導きましょうか。拍桃姫！！」九路星は、間を入れずリズムよく話す。

「う、あああ！！」拍桃姫は、渾身の力で右手から刀を抜いた。

手を貫いていた棘には、返しの逆刃がついていたらしく、貫かれた時以上の激痛を伴った。

（これでは、戦えない。逃げるという選択を選ぶべきであろうが、工粋さんの家に残した否戯を置いていくわけにもいかない。）

「どうすれば、・・・。」拍桃姫は、九路星の手の動きに注意を払いつつ、思考を続けた。

「迷ってるんでしょお。　拍桃姫」九路星は、話す。

「逃げるべきか、ふふっ、でもあんたの性格から言えば、否戯だけは逃がそうと思ってるんでしょ。」

「無駄だからね、あいつも殺しちゃう。」九路星は笑顔のまま、顔を傾ける。

「べらべらとしゃべるのは、油断してるから？それとも敗北を確信してるから？」

「ああ！？敗北じゃなくて勝利の間違いでしょ・・・。否戯！！」九路星の視線が拍桃姫から逸れる。

「あら、ごめんなさい。でも、油断してることは否定しないの。ふーん。」否戯がわざとらしくこたえる。

「否戯！　大丈夫なの？」拍桃姫が、否戯の側へ寄る。

「大丈夫よ。　ほら、相棒よ。受け取りな。」拍桃姫へ破久修を手渡した。

手渡された破久修は綺麗に保全され、歴戦の傷がなくなっていた。

「ありがとう。っ痛！」やはり、右手で破久修を持つと激痛が走る。

「酷い傷、あなたの方こそ、大丈夫なの？」否戯は拍桃姫の右手を見てギョツとする。

「本当にアイツらの言う通りになった……。」

九路星は二人に聞こえない声で零した。

「酷い傷だけど、調度良かった。こんだけ流れていれば十分でしょ。」否戯は拍桃姫の傷と破久修を見て言った。

「さあ、ものすごく痛いだろうけど、我慢して破久修を握りしめな。貴女の生体情報を破久修に覚えてもらうの。」否戯の言葉から察するに逃げるつもりなどないことがわかった。

拍桃姫は、激痛に耐えながらも破久修を強く握りしめた。

血みどろの手で握っても破久修にこれといった変化は無かった。

「さあ、これで破久修はあなたを覚えたわ。」否戯がこたえる。

「えっ 覚えたってどういう意味なの？」

「それは闘ってみてのお楽しみよ。」否戯の表情が少し自身に満ちたものになった。

「えーっと、お話は終わったかしらー。」瞼を半開きにした九路星が言った。